高松塚古墳墳丘の景観変遷（上）

米　田　文　孝

2012年３月、高松塚古墳は発掘調査と彩色壁画の発見から40年を迎えた。古墳は1973年に特別史跡、壁画は1974年に国宝に指定されたが、結果的に壁画の現地保存が困難になり、石室（横口式石槨）を解体して保存修理を実施する目的から、2006年度墳丘の発掘調査が実施された。

この発掘調査では、90～150年周期で襲来した南海・東南海地震による亀裂痕が確認されるとともに、終末期古墳の墳丘構造の解明につながる重要な知見が得られた（図１）。

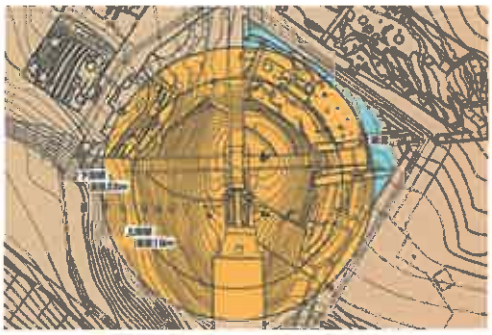

図１　高松塚の平面形と規模

その後、発掘調査の成果に基づき、墳丘は築造当時の姿（二段築成の円墳、下段部直径23m、上段部直径18m）に復元された（写真１）。復元された墳丘の表面には、風雨による墳丘の崩落を防止する目的で芝草が貼られており、当然のことながら樹木はなく、今日における一般的な古墳の墳丘の外観とは大きく異なっている。

写真１　復元された高松塚古墳の墳丘

ところで、大山（だいせん）（仁徳陵）古墳をはじめ、百舌鳥古市古墳群の倭国大王墓と推定されている大型古墳には近世～近代に鳥居や拝所、柵が設置されて区画され、立ち入りが制限されていることもあり、その墳丘は鬱蒼とした叢林で覆われている。現在、宮内庁の管理下にあるこのような陵墓に限らず、特に都市部では社叢（鎮守の森）と並び、古墳は貴重な緑地として認識されている。しかし、復元された高松塚古墳の墳丘に見るように、現在、我々が目にすることができる古墳の墳丘外観はその築造当初とは大きく異なっている。ここでは高松塚古墳の墳丘外観の変遷過程をみたい。

高松塚古墳は８世紀第一四半期、平城京遷都と相前後する時期に築造されたが、近世の山陵図にその外観が描かれるまで、墳丘外観の変遷を具体的に知ることは困難である。墳丘築成当時の版築による墳丘表面の外装状態については判明しないが、天武・持統陵古墳（檜隈大内陵）や牽牛子塚古墳のように、大小の凝灰岩の切石が八角形に組み合わされ、その表面が石材で被覆された墳丘構造でないことは明らかである。

檜隈大内陵については、1235（文暦２）年に盗掘されたときの実検記である『阿不幾乃（あふきの）山陵記（御陵日記）』がある。「件（くだん）の陵の形八角、石壇一匝（めぐ）り、一町許（ばかりか）欠、五重也、此の五重の峰に森十余株有り」と記され、すでに墳丘には10本余の樹木が繁り、古来よりの儀式・慣例の衰退につれて、次第に墳丘が荒廃していく状況を看取できる。この檜隈大内陵の盗掘と相前後して高松塚古墳も盗掘を受け、壁画が毀損されるとともに、墳丘も盗掘坑により南側が部分的に損壊した。

時が流れ、徳川綱吉の時代には文芸復興の気運とともに、陵墓の荒廃が慨嘆されるようになり、元禄・享保・文化・安政・文久年間に山陵図が作成され、必要に応じて修陵が行われた。また、明治期にも山陵図の作成や環境整備が加えられた。

皇陵調査事業の嚆矢である元禄期には、京都所司代松平信庸の命により、南都奉行が絵図と各陵の由来書からなる大和国山陵図を作成・提出した。同じく、大坂城代が河内・和泉・摂津各国の山陵図を作成・提出したという。皇陵の

比定には『延喜式』に登載の陵名を基礎として探索・措定された。檜隈安古岡上陵（文武天皇陵）には比定すべき古墳が見当たらなかったため御陵山（高松塚古墳）が措定され、檜隈大内陵とともに不分明陵と区分された。この1697（元禄10）年の皇陵調査には、前年に刊行された松下見林の檜隈付近の皇陵についての考定（『前王廟陵記』）も影響したのであろう。

このとき、陵墓の書き上げを命じられた平田村（現・明日香村）の庄屋三郎右衛門と年寄孫三郎が南都奉行所に提出した「覚」（元禄十丁丑年山陵記録）には、高松塚古墳の位置や規模などが記録されるが、墳丘の外観周囲の状況について、「一　御塚之廻リ池又ハ端籬（まがき）等茂無御座候、一　御塚山ニ立木無御座候　芝山ニ而芝草平田村江苅來来リ申候」とあり、墳丘一帯は村民が採草地として利用していたらしい。また、高松塚古墳は檜隈安古岡上陵に当てられたため年貢免除地となり、幕末期（文久の修陵）から明治14年の指定解除にいたる混乱期にも、国有地として旧状が維持される端緒となった。

同じく1697年に大和国内の不分明陵を踏査した奈良（南都）奉行所与力玉井与左衛門・坂川武右衛門が作成した「文武天皇御陵歟」によると、高松塚古墳には松15本が茂り、墳丘の木を伐採すると、ことのほか祟りがあることや、一里塚のような姿に見えたことが記されている。元禄期の高松塚古墳を描いた転写本には、墳丘だけ

写真２　元禄期の高松塚古墳（1）（『大和国陵廟之図』）

写真３　元禄期の高松塚古墳（2）（『大和国御陵図』）

のもの（写真２）と丸垣を加えて描いたもの（写真３）とあるが、墳頂部の松は斜面の松とは樹齢が異なる表現で描かれており、この墳頂部の大木が古墳名の由来ともなったのであろう。

翌1698（元禄11）年には、文武天皇陵として高さ６尺、全周27間（約48.6m）の丸垣が巡らされた。奥書がないため確認できないが、この時の姿を描写した垣仕様付絵図の可能性がある絵図（写真４）を参考にすると、墳丘裾部に接するように丸垣が設置されていることから、その直径は約15.5m、高さ6.3m を測り、この時点までに墳丘裾部は開墾などで切り崩され、1972年の発掘前の墳丘形態に近い形態であったのであろう。また、墳頂部の松は目通り廻り５尺（直径約50cm）を測ることがわかる。

その後に作成された山陵図をみると、いつしか墳頂部以外の松は姿を消し、墳頂部に大木に成長した一本の黒松が樹立する姿が表現されている。2006年度の高松塚古墳の墳丘調査では、前述したように、地震による亀裂痕に加えて、この大木の直根による版築の攪乱が断面で確認されている（写真４）。

〔引用・参考文献は（下）に掲載します〕

写真４　墳丘断面に現れた大木の根の痕跡

文学部教授